

序文

経済学の世界では、人は反対者に誤りを悟らせることはできない。できるのは反対者に誤りを確信させるだけだ。そして、自分が正しい場合でさえ……反対者の頭が既に相いれない意見でふさがれていたら、反対者を説得することはできない。

——ジョン・メイナード・ケインズの言葉といわれている

経済についての社会通念として、テレビのキャスターが解説したり、マスメディアや主流の経済専門誌で書かれていることは、われわれが生活している世界には通用しない。本書の目的は、この事実を説明することである。読者として、理解力のある一般の方や経済学を学んでいる学生、さらには経済を専門にしている学者を考えている。私は、二十世紀の最も偉大な経済思想家であるジョン・メイナード・ケインズの革命的な経済分析が、お金を利用している市場指向の今日の企業経済に最も適していることを具体的に説明したい。

読者が伝統的経済分析の影響を受けることが少なければ少ないほど、その人の頭が、ハーバード大学の

ジョン・ケネス・ガルブレイス教授が正統派経済学者の「社会通念」と「悪意のない欺瞞」と呼んだもので満たされることはより少なくなる。したがって私には、一般の読者に貨幣経済が現実にとどのように機能するかを納得させるのは、経済学の学生を納得させるよりも容易である。そして最も難しい仕事は、社会通念を機械的に教えている経済学の専門家を納得させることだ。それゆえ、私は明確に説明するように努めるが、学生や教授達の考えを揺さぶるために、時には専門用語や手段を持ち込むことが必要となった。これらの技術的論議のうち最も難しい部分は第六章の付録とした。この付録を飛ばしても話の筋は分かるので、一般の読者は躊躇なく読み飛ばして差し支えない。

本書は、始めの三つの章で、ケインズが伝統的正統派経済学者に成長するまでのこと、そして第一次大戦とその後の経済的現実から、自分が教え、信奉してきた経済学に欠陥があることをケインズが確信するに至ったことを簡潔に説明する。第四章から六章では、ケインズが十年以上の思索の結果、どのようにして古典派経済理論と異なる自分の分析を確立することができたかを説明する。第七章では、われわれが生きている経済体制についてのケインズの見解を要約する。一般の読者は、第七章の議論が正しいのはあまりに明白なことに気付き、主流の経済専門家がこの説明と分析を受け入れないことを知って驚くだろう。第八章から十章では、二十一世紀の世界経済問題を解決するためにケインズの分析を発展させる。第十一章ではインフレ問題を論じ、ケインズの分析がなぜインフレーションとの闘いの提案につながるかを説明する。その闘いは、インフレ・ターゲットが可能であると主張する中央銀行家による悪意のない欺

瞞とは全く異なるものだ。最後に第十二章では、第二次大戦直後の反共主義（マッカーシズム）の魔女狩り、それに加えて経済学の学問分野の数学化が、革命的であったケインズの理論を不明瞭にしたことや、なぜケインズ理論が全ての専門の経済学者の手助けにはなっていないのかを説明する。

多くの人が本書を読んだ暁に、ケインズ分析が経済学者と政府の政策作成者に再び影響を与えるようになり、われわれが経済体制の大きな欠陥を取り除くことに乗り出すことを期待したい。われわれが生活している経済体制の大きな欠陥とは、仕事を望んでおり、能力があり、働くことができる全ての人々に仕事を与えることができないことだ。また、現在のグローバル化した世界で先進国と途上国の双方が所得と富の不平等の拡大に見舞われていることだ。

目次

序文

iii

第一章 ケインズとケインズの革命的考えの紹介…………… I

I 初期のケインズの知的環境

5

II ケインズの知的な成長

7

第二章 第一次大戦とその余波がケインズの考えに与えた影響…………… II

第三章 ケインズの中道…自由主義リベラリズムは真に新しい道である…………… 2I

第四章 ケインズの『一般理論』の前と後…………… 29

I ケインズの革命的理論対主流の古典派理論

29

II 公準と理論の構築

44

III 中立的貨幣の公準

45

IV 粗代替性の公準

51

V 不確実性とエルゴードの公準

52

VI ケインズの革命的な分析を阻止する

59

第五章 貯蓄と流動性——ケインズの一般理論と古典派理論の概念上の相違……………63

- I 古典的な本とはなにか 63
- II セーの法則 67
- III 総供給関数 72
- IV 総需要関数 74
- V フリードマンによる別の貯蓄の定義について的小論 90

第六章 ケインズの総需要関数のさらなる識別化……………95

- I 二つの総需要構成要素 95
- II 投資支出 98
- III D_2 の他の構成要素はどうか 106
- IV 政府の税と支出 107
- 第六章の付録…総供給関数と総需要関数の導出 III 113

第七章 お金、契約および流動的金融市場の重要性……………123

- I 貨幣契約の実体 124
- II 契約、市場、および流動性というお守り 128
- III 流動性と契約 143
- IV 金融市場の役割 147
- V 金融市場とケインズの流動性理論 158

	VI	市場秩序の必要性	159
	VII	にわか景気とそれに続く不景気	161
	VIII	現実には、予め決められていて、不変であり、エルゴード的に 知ることができるだろうか。それとも、非エルゴード的で、 知ることはできず、変化するものだろうか	165
	IX	重大な決定とシユンペーターの起業家精神	186
	X	政策の立案	190
第八章		第二次世界大戦と戦後の開放経済体制 ……………	193
	I	戦後の開放経済体制に対する計画	195
第九章		古典派の貿易理論対ケインズの国際貿易と国際収支の一般理論 ……………	209
	I	古典派の国際貿易理論の唱える利益	209
	II	国際貿易と自由化された市場——事実	211
	III	貿易、国の富み、比較優位の法則	212
	IV	為替相場切下げ（平価切下げ）は常に貿易収支赤字を 改善できるだろうか。	227
第十章		世界通貨体制の改革 ……………	239
	I	第二次大戦後初期の歴史の教訓	239
	II	ブレトン・ウッズの経験とマーシャル・プラン	241

III	ケインズ、自由貿易、および完全雇用を促す国際決済システム	251 244
IV	国際決済システムの変更	

第十一章 インフレーション 263

I	契約、価格、インフレーション	264
II	ケインズの世界でのインフレーションの進行	266
III	所得インフレーション	269
IV	所得政策	270

第十二章 ケインズ革命…誰がコマドリを殺したかを示す証拠 279

I	硬直的賃金と失業問題	287
II	ケインズ革命を実際に中絶させたのは誰か	291
III	サミュエルソンの新古典派総合ケインズ理論	292
IV	ケインズ理論のアメリカへの到来	296
V	サミュエルソンはどのようにしてケインズの理論を学んだのか。	298
VI	サミュエルソンの新古典派ケインズ理論とケインズ／ ポスト・ケインズ派理論の間の公準についての違い	304
VII	ヒックスのIS-LMモデルはどうか。	307
VIII	結論	310

後書	二〇〇八年から〇九年の大金融危機	315
Ⅰ	何が二〇〇八年の経済・金融危機を引き起こしたか。	315
Ⅱ	金融市場政策	330
Ⅲ	二〇〇九年に実体経済を回復させる政策	335
訳者あとがき	339
訳者による参考文献		36
参考文献		27
原注		13
索引		1